

金子晴勇著 『近代人の宿命とキリスト教 世俗化の人間学的考察』

(聖学院大学出版会、二〇〇一年、二九六頁)

芦名定道

本書の著者金子晴勇氏は、一連の大著『ルターの人間学』『アウグスティヌスの人間学』『近代自由思想の源流』『マックス・シェーラーの人間学』『ルターとドイツ神秘主義』から、数多くの啓蒙書、入門書、教科書に至るまで、幅広い著作活動で知られ、長年にわたって、日本のキリスト教思想界をリードしてきた研究者である。氏の京都大学における集中講義の一受講生であった書評者としては、金子先生と呼ぶ方が自然ではあるが、学会誌の書評という場を考慮し、以下金子氏と呼びたい。

さて、本書は、氏の他の大著と比べ、決して大きな書物ではない。しかし、宗教社会学など幅広い学問領域が論じられる一方で、ルターなどについての深い洞察が随所に示されていることからわかるように、本書は金子氏のキリスト教的人間学のいわば集大成と言える内容となっている。

まず、本書の目次(各章のタイトル)を示しておこう。

序論

第一章 現代ヨーロッパ社会における世俗化の問題

第二章 宗教社会学における世俗化の理解

第三章 現代神学における世俗化の理解

第四章 現代の諸科学における世俗化の理解

第五章 世俗化社会における霊性の回復

あとがき

本書の全体は次の三つの問いによってまとめることができるように思われる。すなわち、世俗化において何が問題なのか(序論、第一章)、世俗化をどのように理論的に把握するのか(第二、三、四章)、世俗化の問題にどう答えるのか(第五章)。本書では、これら三つの問いが、相互に緊密に結びつけられながら、順次論じられている。以下、各章の内容を概観することにしよう。

一 世俗化において何が問題なのか

まず序論では、本書で論じる問題が何であり、それをいかに論じるかについて、方向付けがなされる。その問題とは、「世俗化によって生じている人間性の危機」、「宗教的な霊性の喪失」(二五頁)という現代の精神的状況であり、この状況を分析しそれに答える方法がキリスト教的人間学に他ならない。世俗化の実態を正確に理解するには、「宗教社会学の成果を全体的かつ詳細に検討」しなければならない(一一頁)。なぜなら、世俗化は近代社会の本質に関わっているからである。しかし、世俗化は宗教あるいは神学そのものの問題であるのだから、世俗化の理解には、宗教社会学の成果を超えて、「宗教的な、もしくは神学的な考察が不可欠」になる(12頁)。ここに導入されるが人間学という方法論的視点である。つまり、「新しい近代の人間学」(「人間に共通な本性に基づいて形成された

人間学」)が、「ヨーロッパにおける世俗化の最大の原因」であるのだから(二二頁)、「世俗化の問題を人間学的な視点から考察する」ことが、試みられねばならないのである。

第一章では、まず世俗化の概念規定がなされ、続いて、世俗化の現象形態の分析が行われる。この際に本書で繰り返し行われるのは、世俗化と世俗主義の区別、つまり世俗化の両義性の議論である。「元来、世俗化とは神聖なものが世俗のために用いられる現象であり」、「宗教が外形的には宗教的構造を保ちながらも非宗教的な目的に用いられている現象」(二九頁)である。この意味での世俗化は、宗教改革の信仰によって積極的に推進されたものであり、「世俗化は『キリスト教信仰の合法的結果』(ゴーガルテン)」(三〇頁)と言わねばならない。しかし、問題は、この信仰的に正当な世俗化が、「いつしか俗物根性に染まった『世俗主義』に転落」(二八頁)してしまったということにある。世俗化論に求められるのは、世俗化が世俗主義に変質するプロセスの解明に他ならない。世俗化は、近代西欧社会において典型的に生じた事態であり - 「世俗化の概念は宗教的なものがそうでないものから注意深く区別される社会においてのみ適応可能な概念である」(三一頁) - 、金子氏が、政治的な次元、知的な次元、個人的な次元という三つの次元を区別しているように(三二 - 三七頁)、かなり複雑な現象である。本書では、近代精神の危機としての世俗化(宗教的世界の消滅)を、「宗教的象徴とその衰微」「理性の技術化」「大衆化現象」「ニヒリズム」の四つの側面から具体的に浮かび上がらせようとしている。どの議論にも、金子氏の広く豊かな学識があふれているが、ここでは、最初の「宗教的象徴とその衰微」について若干の紹介を行っておきたい。宗教的象徴として取り上げられるのは、王権、自然、人格の三つであるが、世俗化はこうした宗教的象徴の衰微として現象する。たとえば、本来「自然には神の創造のわざを指し示す象徴機能が備わっていた」(五一頁)にもかかわらず、世俗化以降を生きる近代人にとって、「詩編一九編にあるような自然理解は完全に消滅してしまった」(四九頁)。

こうした、世俗化の現象形態の分析の最後に、金子氏は、第五章をいわば先取りするかのように、危機としての世俗化を克服する可能性について、次のように触れている。

ニヒリズムが単なる神や神々の否定にとどまらず、無神論を生み出している近代的自我そのものの否定へと向かい、その自我を突き抜けて徹底されるならば、ルターが説いた「人間の自由意志は無(ニヒル)である」という立場から一転して「信仰のみ」の立場に転換できる。(七四頁)

二 世俗化をどのように理論的に把握するのか

第二章では、世俗化に関する代表的な宗教社会学の諸学説(ヴェーバー、バーガー、ウイilson、ルックマン)が取り上げられており、神学者や哲学者による現代批評のレベルを超えて、より実証的な仕方で世俗化の事態に迫ろうという本書の意図がよく示されている。すでに指摘したように、問題とすべき点は、世俗化と世俗主義の区別、前者から後者への移行であるが、それは、ヴェーバーの世俗化論では次のように展開されている。まず、世俗化は、「呪術からの解放」 - 「古代ユダヤ教の預言者にはじまり、一七世紀のピューリタンにおいて完成する」(八六頁) - のプロセスの中に位置づけられ、「ルターの宗教改革により多くの修道院が廃止され、聖職と世俗の職業の区別は撤廃」(九〇頁)

されることを通して、「神への奉仕のために方法的に合理化された日常生活の行為」(八九頁)の成立として具体化する。しかし、この世俗化は、「神への信仰によって富が増すようになると、信仰の『腐食現象』と言われている世俗化も必然的に起こり得る前提条件が揃う」(九三頁)と指摘されるように、直ちに世俗主義化のプロセスにさらされることになる。つまり、宗教改革のもたらした新しい職業意識(世俗化)は勤労と節約を通じて富の蓄積をもたらし、こうしてもたらされた富によって、現世的欲望が肥大化し、宗教は形骸化するにいたるのである(世俗主義)。これが、ヴェーバーの世俗化論が描く世俗主義化のプロセスであり、金子氏の説明はきわめて明解である。ヴェーバーに続いて、バーガー、ウイルソン、ルックマンが順次紹介されるが、「ウイルソンを除くといずれも人間学的な視点が導入されていて魅力あるものとなっている」(一四一頁)とあるように、金子氏自身が、ウイルソンの説よりも、バーガーとルックマンによる知識社会学的な世俗化論に共感していることは明瞭である。とくに、バーガーの議論は続く各章でも繰り返し取り上げられており、氏の高い評価が伺えるが、ここでは、生活世界の複数化と世俗化との内的連関をめぐる議論から、次の文章を引用しておきたい。

宗教がこの複数の生活世界を統合して一つの世界観にまとめることが困難になっているからである。さらに個人の主観的意識の中で宗教の信憑性が著しくおびやかされている。(一一〇頁)

第三章で取り上げられるのは現代神学における世俗化論であるが、金子氏は、バーガーの『異端の時代』における宗教思想の三つの道の区別を参照しつつ(一四八頁)、バーガーの言う「帰納的な道」(代表は、シュライアーマッハー)を「現代において有効な宗教思想」とした上で、この道に立つ「現代の神学者の世俗化論」として、ゴーガルテン、コックス、パネンベルクの説を順次検討してゆく。金子氏の紹介と分析は細部に及んでいるものの、この章の議論は次のようにまとめることができるであろう。まず、コックスの世俗化論は、先のウイルソンの場合と同様に、神学的な世俗化論の代表的な学説として紹介されてはいるものの、基本的にはあまり評価されていない。またパネンベルクの議論は、宗教改革と近代世界(近代の人間学)と世俗化との歴史的連関を指摘したものとして、やや限定的な紹介にとどまっている。コックスやパネンベルクに比較して、もっとも高い評価を受けているのは、ゴーガルテンの世俗化論であり、第一章における世俗化と世俗主義の区別の議論と比較すればわかるように、金子氏の議論は、ゴーガルテンの世俗化論と基本的に一致している。世俗化には二種類があり、本来の世俗化(「ルターが実践した世俗化」、「新約聖書的な信仰の結果として示されている形態」と世俗主義とが明瞭に区別されねばならないことや(一六〇頁)、「世界に対する人間の自由がひとたび開かれた後には、信仰なしにも世俗化はありうるがゆえに、世俗主義が起こってくる」(一六一頁)という指摘などは、本書自体の基本的な見解であると言えよう。そして、何よりも、ゴーガルテンと金子氏との一致点は、「世俗化がキリスト教信仰に由来しており、その解決はキリスト教信仰の本質まで遡って行われなければならない」(一五三頁)という見解に認められる。この世俗化克服の議論は、第五章においてさらに具体的に論じられることになる。

第四章では、宗教社会学や神学以外の諸科学における世俗化論が、歴史学者(ヘーゲ

ル、ドーソン、ラブ)、思想史家(トレルチ、レーヴィット、パウマー)、自然科学者(ヴァイツゼカー)、人間学者(プレスナー、ゲーレン)といった諸分野にわたって、きわめて広範に論じられる。とくに、自然科学者ヴァイツゼカーの世俗化論(科学主義=科学信仰が代用宗教であること、世俗化の意義が両義的であることなど)までも、視野に入れられている点で、金子氏の博識は圧倒的であると言わざるを得ない。個々の議論に立ち入って紹介することはできないが、この章の意図に関して、次の点を指摘しておきたい。

この章の意図の一つは、第二、三章の世俗化論を、諸科学、とくに歴史学によって実証的に裏付けることにあるように思われる。それは、歴史家ラブについて、トレルチ、パネンベルクの説(「ドイツにおける三〇年戦争の時代に近代への開始となる一つの深い切れ目を見出した」)の歴史研究による実証という評価がなされる点にも表れている(一九九頁)。もちろん、歴史学的な実証によって、世俗化論の妥当性が一義的に根拠づけられるわけではない。つまり、宗教改革と近代思想の区分をめぐる思想史家の世俗化論に関して、トレルチ(非連続の立場)、レーヴィット(連続の立場)、パウマー(段階的な展開)といった多様な解釈が存在し得るのである(二〇一頁)。しかし、金子氏が諸科学、とくに歴史学による実証的な裏付けを重視している点は疑いもない。

三 世俗化の問題にどう答えるのか

第五章では、これまでの世俗化論を簡単にまとめた上で(ハーバーマスの議論を追加しつつ)、いよいよ世俗化の克服(=霊性の回復)へと論が進められる。最終的には、キリスト教的人間学による霊性の再発見と愛の精神がそのポイントとなるが、この結論に先だって、霊性を論じるいわば導入として、二つの議論がなされる。まず、「すべての神学を人間学から再考する」(二四五頁)というバーガーの提案に従って、日常的経験における「超越のしるし」が、この人間学の基礎として取り出される。すなわち、母親に対する子どもの信頼、楽しい遊びがもたらす解放と平安の不思議な性質、希望、形而上学的な問いの厳存(夜の意識)という四つのしるしである。こうした超越のしるしの存在は、「世俗化社会に生きる人間も、人間であるかぎり、生まれながらにして宗教心が備わって」(二四三頁)いるということを示唆するものであるが、しかし、本書で取り上げられた世俗化論が論じるように、この人間本来の宗教的可能性は、世俗化社会では忘却され現実化されぬままにとどまっている。霊性の回復は、これらのしるしの経験的知覚の取り戻しを必要とする。次に、この世俗化の事態を確認するために、金子氏は物語の問題へと論を進める。取り上げられるのは、ゲーテ、ドストエフスキであるが、そこに読み取られるのは、近代人の自我の問題、自我の肥大化、自己破壊の現象、欲望の悪無限であり、こうした世俗化は、物語における「超自然的な奇蹟物語の終焉」(二六五頁)に象徴的に現れている。金子氏はこの連関において、レッシングの『賢者ナータン』とシャミッソーの『ペーター・シュレミールの不思議な物語』を詳しく分析している。

以上に基づいて世俗化(世俗主義)の克服の道が論じられるのであるが、金子氏が指摘するのは、キリスト教的人間学における霊性理解と愛の精神の二点である。キリスト教には人間理解における三区分法(霊、魂、身体)の伝統が存在し、「ヨーロッパの人間学的伝統」(実例として、ルター、メーヌ・ド・ピラン、キルケゴール)を形成してきた。これらの霊、魂、身体は、「霊性・理性・感性として三つの基本的な心の作用」(二五一頁)

とみなされるべきものであるが、この靈性こそが、先の本来的宗教性の働きの担い手であり、信仰とよばれるものに他ならない。ヨーロッパ近代の歩みはこの靈性を無視（神律の排除）し、世俗主義へ至るものであった。したがって、現代において世俗化を克服するには靈性の回復が不可欠であり、そのためには靈性の伝統が再評価されねばならないのである。金子氏は、とくに、シュライアーマッハーの「心情の宗教」に現れた「神秘主義に特有の用語」（二八一頁）、すなわち、人間存在の「深み」「神殿」「根底」という諸表現に注目している。こうした、神秘主義的な靈性の伝統の再発見は、「愛の精神」へと繋がって行く。なぜなら、ルターやベルナルドにおいてそうであったように、靈性は超越的な存在や永遠者を捉えるだけでなく、「力の満ちあふれた愛」となって働くからである。この愛の精神が、現代の世俗化社会において、新しい倫理的形成力となると、世俗主義の克服は真に可能になると言えよう。こうして、本書は次のように締めくくられる。

わたしたちは宗教改革時代に起こった世俗化の肯定的な意義を確認し、キリスト教の靈性に目覚め、喜びをもって愛のわざに励むならば、現代の世俗化社会のもっている人間の危機を克服する希望をもつことができる。大切なのは社会に対していっそう積極的に関与する愛の精神なのである。（二八八頁）

これまで、本書の内容をやや詳しく概観してきたが、最後にいくつかのコメントを加えることによって、この書評を終わりたい。

1 本書の特徴は、現代の学問諸領域の広範な議論を縦横に引用しつつ、世俗化を多面的に論じている点に認められる。しかし、この特徴はしばしば相互の連関が不鮮明な諸学説の並記となり、議論が表面的なレベルにとどまっているとの印象を生じる。たとえば、第三章第三節には、レーヴィットへのブルーメンベルクの批判と、このブルーメンベルクへのパネンベルクの批判、という問題連関が存在しているわけであるが、この連関は十分に論じられていない。また、第四章では、歴史家と思想史との関係がどのようになっているのか、また哲学人間学がこの第四章で論じられるのはなぜかなど、構成上の疑問点が散見される。もう少し取り上げる諸理論を限定することによって、金子氏自身の見解を明確化するという叙述の仕方も、可能な選択肢だったのではないだろうか。

2 本書では、世俗化を分析するに際して、「実証」「実態」という点がしばしば強調されている（七五 - 七八、一〇六、二〇〇頁など）。しかし、世俗化に関して、「その証拠を世論調査やアンケート調査によって得ることができる」（七五頁）という議論は慎重を要するのではないだろうか。少なくとも、本書でも論評されるウイルソンの、「世俗化はいつの時代にもあった」（一一九頁）という多くの世俗化理解（近代 = 世俗化という「単純すぎる」見方）に対する批判は、ルックマンやラブを参照することによっても、十分に論駁されていないように思われる。

3 本書の基本的見解が、危機としての世俗化（世俗主義）を、宗教改革の精神（本来の世俗化）によって、とくに、神秘主義的な靈性の伝統と愛の精神において克服することである点は、すでに確認した通りである。しかし、現代の宗教的状况が抱える諸問題にとって、この試みはどれだけの有効性を有しているのだろうか。本書では「多元主義」「多元化」「複数化」が世俗化要因としてもっぱら否定の意味で論じられているが（一〇四 -

一〇六、一〇八 - 一一一頁) 現代の宗教的多元性を理解するには、限界があるように思われる。というのも、本書では主に西欧近代における問題状況が扱われているが、現代の宗教的多元性は、西欧近代における教派的多元性や宗教的寛容の議論だけでは処理できないからである。問題は、霊性(本来的な世俗化の精神性)の回復による世俗主義の克服という本書の基本線と、現在問題化している宗教的多元性とがどのように関連づけられるかである。

以上、いくつかの批判的なコメントを述べてきたが、これらが本書の意義を否定するものでないことは、先に行った本書の概観から明らかであろう。問われているのは、本書の読者自身が自らのフィールドで本書の世俗化論をいかに批判的に受け継ぎ、展開するのか、ということなのである。